

## 平城宮・京出土の瑇瑁

はじめに 奈良時代の工芸品を彩った材料のひとつに、瑇瑁<sup>たいまい</sup>がある。その利用のありかたは、螺鈿紫檀五絃琵琶、瑇瑁螺鈿八角箱といった正倉院宝物の数々や、いくつかの伝世品<sup>2)</sup>によって知ることができる。一方、遺跡からの瑇瑁片の出土は、奈良県桜井市上宮遺跡、明日香村飛鳥京跡、飛鳥池遺跡など飛鳥時代の例が報告されてきた。平城宮跡発掘調査部考古第一調査室では、2000年度の第314-7次調査での出土を機会に、当研究所が平城京内で実施した発掘調査によって出土した瑇瑁片の再整理を行った。ここでは、これらの資料を提示し若干の所見を付すことにする。

なお、正倉院宝物の材質調査の結果、これまで瑇瑁とされてきたものには、タイマイばかりでなくアオウミガメ、およびタイマイ様角質物質（海ガメ以外の素材で、馬・牛の爪あるいは角などが想定されている）のあることが明らかにされている<sup>3)</sup>。

資料 これまでにA～Fの6箇所の調査で、19点が出土している（図30・31）。

A 第21次調査東区（1964） 平城宮内裏東外郭の調査で、宮城東部における基幹排水路である南北溝SD2700から1点出土した（1）。SD2700では、溝底から天平元年の年紀をもつ木簡が、中間層からは天平勝宝～天平宝字年間<sup>2)</sup>のものが、最上層からは延暦二年のものが出土した。瑇瑁片は中間層から出土している。

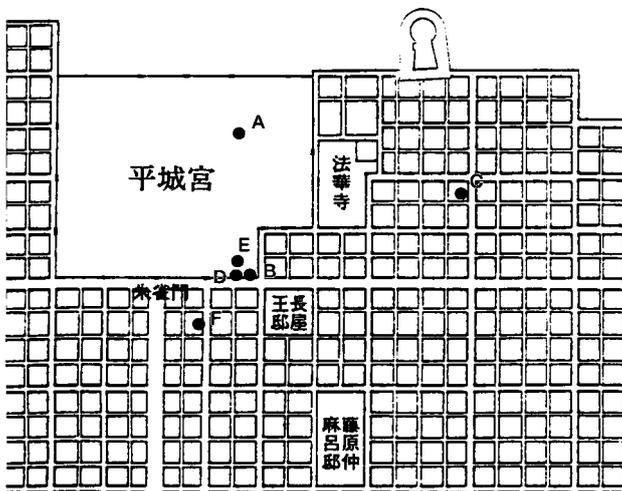


図30 瑇瑁出土位置図

B 第32次補足調査（1966） 二条大路に面する平城宮東南隅の調査で、南面大垣の内側に接して西から東へ流れる溝SD4100Aから1点（2）、SD4100Aの北に沿って流れる東西溝から3点（3.4.5）、包含層（整地土）から2点（6.7）出土した。SD4100Aは南面大垣の内側を東西に走る宮内道路の南側溝とされ、埋土からは神護景雲年間に集中し下限を宝亀元年とする多量の木簡や、鞆羽口、るつば、鉾滓、金属製品片などが出土している。

C 第141-17次調査（1982） 平城京左京二条三坊十六坪の調査で、坪中央やや南よりにおいて坪を東西二分する線上に沿った土坑SK2338から3点（8.9.10）出土した。SK2338からは奈良時代前半の土師器・須恵器が出土している。

D 第155次調査（1984） 第32補足調査（B）の西南に接する宮東南隅の調査で、前述のSD4100Aと南北溝SD11620Aが交差した東北隅に重複し、両溝を掘り込む土坑から1点（11）出土した。

E 第273次調査（1996） 平城宮式部省東方官衙の調査で、官衙区画西北隅の不整形な大型の土坑SK17551から2点（12.13）、この土坑の東に接する小土坑から3点（14.15.16）、包含層（整地土）から2点（17.18）出土した。この他に膜状に剥離したものが数点ある。SK17551からは炭・焼土とともに鞆羽口、鉾滓等が多量に出土し、周囲に炭・焼土混じりの埋土をもつ土坑群がともなう。これらは長岡京遷都後の遺構群とされる。

F 第314-7次調査（2000） 平城京左京一条三坊七坪の調査で、坪の東辺中央を北西から南東に流れる流路SD6100の埋土下層から1点（19）出土した。下層からは平城宮土器編年Ⅳ・Ⅴ期の土器類が出土している。

小 結 以上、奈良時代の各時期に出土例がみられた。

これら瑇瑁片は、いずれもきわめて薄く、黒斑が観察される。このうち最大のものは2で、一辺が15cmほどの三角形形状を呈する。7とともに層が多く肉厚な印象を与える。また、1と3には縁辺に直線的な部分が認められる。第141-17次調査出土の3点（8.9.10）は、黄斑（透明部）の明瞭なことが特徴である。

出土地の傾向をみると、図30のように、平城宮の東半、なかでも東南隅に集中していることがわかる。特に、この地区では金属工房に関わる遺構、遺物との共伴がみられることも指摘できよう。

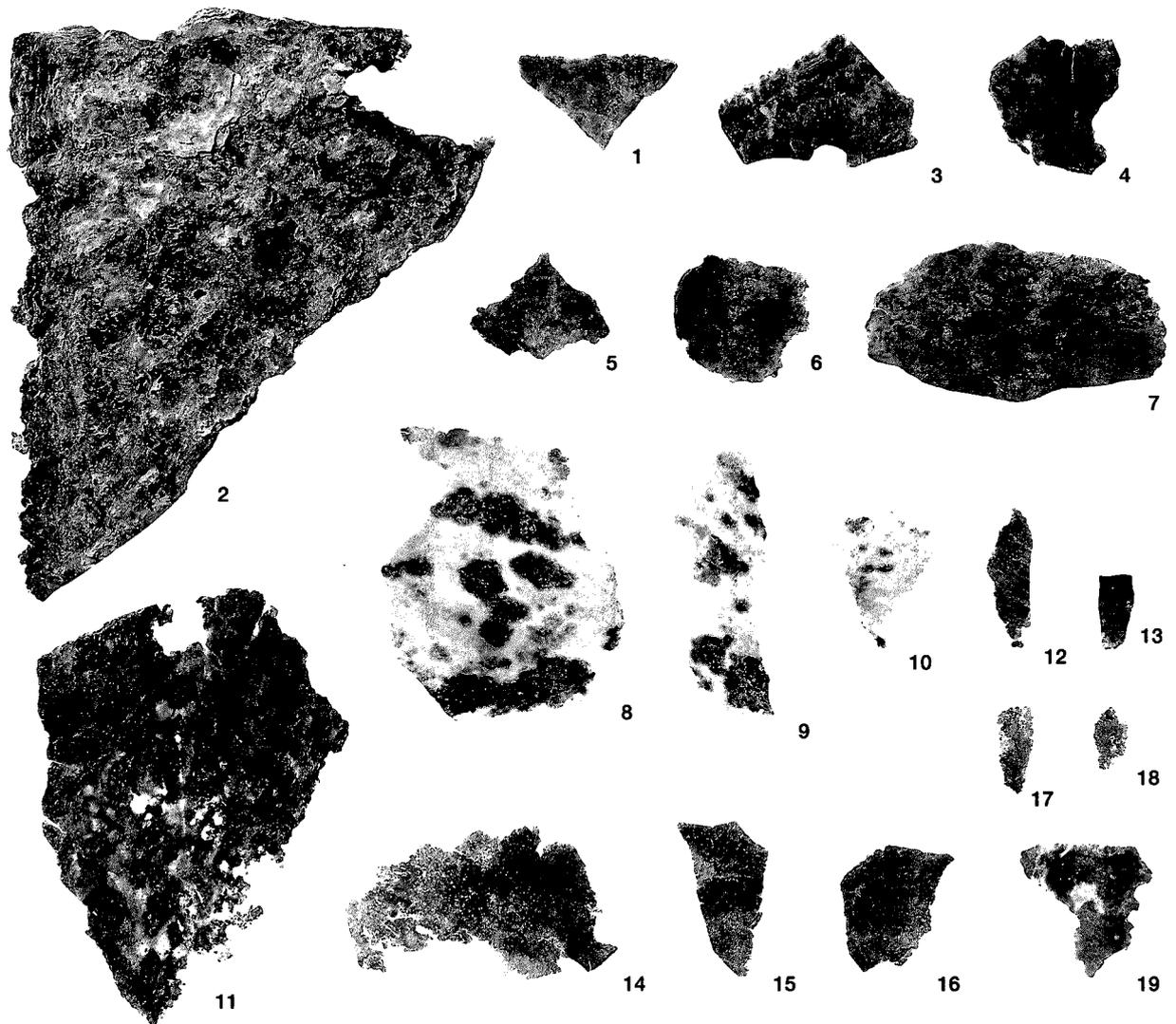


図31 平城宮・京出土の瑠瑠 1:2

出土瑠瑠片のありかたには、分割された素材そのもの、切断等の加工のある素材、加熱・厚みの調整をへた素材<sup>4)</sup>、および製品から剥落した破片などが考えられる。

瑠瑠は南海産の材料であり、国内では入手することが困難である。しかしながら瑠瑠を用いた製品のすべてが、必ずしも舶載品と限らないことは、正倉院南倉の和琴の存在によって知ることができる。瑠瑠片の遺跡<sup>5)</sup>からの出土は、こうした瑠瑠製品の国内生産の問題を検討するうえで有効な手がかりとなろう。

今後、形状の詳細な観察とともに材質の同定と分析を進め、出土瑠瑠片のもつ性格について明らかにしていくことが課題である。

(次山 淳)

- 1) 内田至「正倉院宝物の海ガメ類材質調査報告」『正倉院年報』第13号 1991。木村法光「正倉院の瑠瑠螺鈿八角箱」『正倉院年報』第4号 1982、など。
- 2) 松田権六「三箇の瑠瑠螺鈿八角箱について」『大和文華』第60号 1975。
- 3) 内田至「正倉院宝物の海ガメ類材質調査報告」『正倉院年報』第13号 1991。成瀬正和『正倉院宝物の素材』日本の美術439 至文堂 2002 66頁。
- 4) 越中哲也・菊地藤一郎・永沼武二「正倉院の瑠瑠宝物の工芸技法について」『正倉院年報』第13号 1991。
- 5) 東野治之『正倉院』岩波新書(新赤版42) 岩波書店 1988 58頁。